

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

子供のころ、迷子になったことがある。夏の朝、家の前の道を、ひとりですんずんと、進んでいった結果、とんでもないところへ出てしまったのであった。

気がついて見回した町並みは、自分のまったく見知らぬ場所である。見知らぬひとが歩いている。見知らぬ自転車が止まっている。自分で勝手に歩いてきただけなのに、自分の帰るべき根元のようなものが、ぷつつんと音をたてて切れてしまったようだった。遠心力のような透明な力によって、理不尽に道端に捨てられたような気がした。わたしは、ひとりだった。あたたかい共同体からはじきだされて。こん棒で胸をつかれたような、激しい悲しみの感情がわいた。わたしは大声をあげて、泣いたのではなかったか。

今でも、遊園地やデパートや公園などで、迷子のアナウンスがなされると、その子供の不安が、自分のなかで、同じくらいの大きさにふくらんでしまう。きつと、誰かが迎えに来てくれるに違いないと思うが、そうしたアナウンスは、見つかりました、という結果までは流さない。とっさに脳裏に浮かぶのは、親から見捨てられた、永遠の迷子としての子供のイメージである。それが自分の

なかの悲しみのようなものと共鳴する。

ここはどこ？ すべての迷子は、まずその疑問に射抜かれている。いつも暮らしている場所にいるとき、わたしは、そんな質問をもったことがなかった。自分が生きている場所を見失う不安、それは自分自身を、見失う不安のことなのかもしれない。ここはどこ？ というひとつの疑問は、わたしはだれ？ という次の疑問を、容易に呼び出しそうな気配を持っている。

しかし、わたしは、自分が迷子になったあのかの、ひりひりとした、異様に新鮮な不安を、大人になった今、時々、味わいたいと思うことがある。見慣れたひと、見慣れた土地、いつもの習慣によって、かたちづくられた日常。それを不意に見失って、道の中央で、^Aポーズとしてみたいのだ。迷子になることを恐れながら、同時に、期待する心がある。その心とは、いったい、なんだろう。どこから生まれてくるのだろうか。繋^{つな}がらなければ生きていけないのに、繋^{きずな}がれば、その絆を切ってしまいたくなる。迷子というのは、内的な危機なので、幼児のように泣き声をあげない限り、迷子であるかどうかは、^B外側にはわからない。そう思って改めて眺めてみると、^B生きているひとが、わたしも含めて、みんな迷子に見えてくる。

問

傍線部①「ボーゼン」はカタカナ表記になっ
ていますが、それはどのような印象を与えて
いますか。最も適当なものを一つ選びなさい。

- ① カタカナの単純な字形が、ボーゼンとする子供の純粋さを強調するような印象を与えている。
- ② カタカナの無機的な雰囲気、いかにもボーゼンとして途方に暮れるといった印象を与えている。
- ③ カタカナの硬い感じが、ボーゼンとして思わず身を固くしているような印象を与えている。
- ④ カタカナの外来語的な字面が、ボーゼンとして立ち尽くす異邦人というような印象を与えている。

問 傍線部⑤「生きているひとが、わたしも含めて、みんな迷子に見えてくる」とは、どのようなことですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

① あたたかい共同体からはじきだされたときの激しい悲しみを、なつかしく思っているように見えるということ。

② 本来のあるべき自分自身を見失いそうになりながらも、それを外に表さずに生きていけるように見えるということ。

③ 迷子になったときの異様に新鮮な不安を、もう一度感じてみたいと思っているように見えるということ。

④ 日常性から切り離されることを恐れつつ、日常性から切断されたいと願っているように見えるということ。